

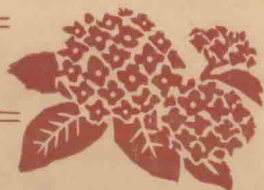


角川文庫

—1947—

挽歌

原田康子



角川書店



昭和三十五年九月十日 初版 発行
昭和四十五年三月三十日 二十一版 発行

定価は、帯・カバー
に明記してあります

庫 文 川 角

挽 歌

著 者

原 田 康 子
はら だ やすこ

発 行 者

角 川 源 義

印 刷 者

中 内 あ き 子
東京都豊島区高田一ノ十二

発 行 所

東京都千代田区富士見二ノ十三
①一〇二 ②東京一九五二〇八

株式会社 角 川 書 店
かど かわ しょ てん

電話東京(滯)三二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

中光印刷・本間製本

挽 歌

原 田 康 子



角 川 文 庫

1947

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

第一章

なんのお祭りなのだろう……。家々の戸口に国旗が立っている。国旗の出ていない家のほうが少ない。わたしの家と道路ひとつ距てた小学校の国旗掲揚塔にも、大きな旗があがっている。その大きな、真新しい旗も、軒先や門にくくりつけられた、赤の襷せた旗も風が吹くとかすかにゆれた。わたしはなんとなく、この晴れきった真昼に街中の物音が絶え、ただ幾千の、幾万の旗だけがひそかに鳴りつづけているような気がした。

しかし、本当はそうではない。繁華街のほうから街のざわめきがきこえてくる。自動車のクラクション、街頭放送のアナウンス、なにかの音楽、通行人たちの足音と会話と衣ずれ。それらの音が全部溶け合い、重なり合った街のざわめきがきこえてくる。

わたしの家のある町の一面は静かだ。小学校の広いグラウンドがあり、所々に小さな空地があり、戦災で焼けのこった古い住宅や、戦災後にできた安普請の木造の住宅が低く並んでいる。わたしの家はおそろしく古ぼけた木造平屋建である。たぶんわたしの祖父が建てた一九二〇年頃は、ひどく洒落た家であったのかもしれない。主屋から一部屋だけ飛びでた応接間の屋根が丸い。門を出てわたしはちょっと自分の家を振りかえってみた。応接間の、細長い二つの窓にカーテンがおろされていた。緑色の光沢のある支那緞子のカーテンである。ただし春でも夏でも秋でも、むしろ冬でも緑色の支那緞子だ。そして、それは年中窓を覆っている。お客様の来ることなんてないのだから。

崩れかけた低い石の門には、旗はくくりつけられていなかった。旗は押入れの隅か、納戸のじめじめした戸棚の中にでも、くしゃくしゃに丸められたまま押しこめられているのかもしれない。白地は黄色くなり、赤い円には虫喰いの痕があるだろう……。

わたしは登山帽をかぶりなおし、ストラックスのポケットに右手を突込んで歩きだした。煙草を買わなければならぬ。わたしが家を出たのは煙草を買うためであつたから。わたしはゆっくり歩いた。しかし二丁先の煙草屋につかぬ前に、わたしの気はかわつた。旗がゆれている明るい祝日の街を、ぼんやり歩いてみたくなつたのだ。

わたしは本当に、家を出るまで今日がなにかの祝祭の日であることになど気づかなかつた。いつもそうなのだ。祝日も週末も、その日が何月の何日であるかさえ知っていないことのほうが多い。お正月とかクリスマスは、その日になると周囲の雰囲気（ふんいき）でわかるけれども。でもいまが秋だということ、わたしは知っている。十一月三日に市民会館でみみずく座の公演がある。わたしは座員三十名ほどの、その地方劇団の美術部の部員だから、やがて来る十一月三日という日付だけは忘れない。でもその日までまだ一月以上あるのだ。

わたしの家の四人の家族のうち、わたしと同様祝日や日曜日に無関心なのは父だろう。でも父は、ときどき「手形の期限が切れる」などとあわてているから、わたしよりも日付けを覚えてるに違いない。ばあやは、几帳面（きょうめん）な性格だから、カレンダーを毎朝めくっている。弟の信彦（のぶひこ）は高校へ行っているから、いつがお休みかということ、ちゃんとわきまえている。

そういえば、今朝わたしが起きたとき、わたしの隣室の信彦の部屋にはまだカーテンがかかってゐた。わたしは窓をあけてみたのだ。今朝といつても、十一時ちかくらしい陽が、雑草（ぞくそう）がのび、朽

ちかけた葡萄棚から垂れさがった山葡萄の蔓が傍若無人に這った中庭に、明るくふりそいでいた。そして信彦の部屋の窓は固く閉ざされていた。いつもなら、わたしが起きる時刻に信彦が家にいた例はない。あわてふためいて朝御飯をかきこみ、学校に行ってしまうのだ。そのあと、さっそくばあやが彼の部屋の掃除をはじめた。わたしはたいいてい、隣室のハタキの音で眼をさますのだ。信彦は、お休みなので、のんきに寝坊していたのだろう。

わたしはでも、そんなことも考えず、ビジャマのまま、父の書齋に忍びこんだ。煙草が欲しかったのだ。

書齋とはいっても、父のその六畳間ほどの洋室は、へんに殺風景なのだ。窓際に大きなデスク、天鵞絨を張った廻転椅子、壁際の古い書棚。部屋には、それだけしかない。おまけに高い書棚はガラ空きで、わずかに上段に世界文学全集が六冊ならんでいるだけである。わたしは、その本も父が読んでいないような気がする。わたしの記憶に間違いがなければ、むかし、たまに父が手にとった書物といえばたしか「実業之日本」という雑誌だけであった。いまは、雑誌ひとつ読もうともしない。

わたしは父の机の引出しを全部開けてみた。どこにも買おきの煙草はなかった。煙草ばかりでなく、上の大きな引出しに、書類がわずかと、ペンと、印と、嚙りかけのチーズが入っているだけで、両袖は見事なほど空っぽだった。いや、片袖の一番下の引出しに、ポンド・ストリートの空罐が、がらがら入っていた。

さいしょからわたしは、煙草がないことを予想していた。一年くらい前から、父はパイプ煙草ばかり用いているのだから。ときどき父の買おきの巻煙草を、こっそり貰っていたわたしは、なんと

かして巻煙草に戻してやろうと考え、父がパイプを銜えだすと、よくからかったものだ。

「似合わないわ。パパはもうダンディじゃないんだから」
などと。

「ばか。これのほうが経済的なんだ」

父の返答は、いつも決っていた。そういいながら、父の喫むのはフリノス・アルバートとか、ボンド・ストリートなどの外国煙草なのである。戦争以来、商売がすっかり駄目になって、家のあちこちに雨洩りがしたり、壁の汚点^{しみ}が地図のように黄色くひろがってゆくのに、父がボンド・ストリートなどを愛用するのは、彼の贅沢^{ぜいたく}で、気取りやで、気の弱い性格を物語っている。

わたしは自棄に、赤い空罐を鳴らして引出しをしめた。そして壁にさがっていた毛のシャノパアのポケノトから、皺^{しわ}の寄った百円紙幣を発見した。

それからわたしは服に着替えて台所に行った。広くて、そして床のきしんだ台所で、ばあやか食器を洗っていた。きつと彼女と父の朝食の後片付けなのだ。わたしは戸棚をあけた。

「お目覚め、ですかね」

と、ばあやは割烹着姿の小太りの背をむけたまま、聞いた。わたしは返事をしなかった。口を利くと、二言目には喧嘩^{けんか}になるに決っているのだ。

「パンないの？」

「キャセロールに入ってる筈ですよ」

わたしは、朝、御飯を食へたくない。食欲がなくて、あの粒々ひかった御飯をのみこむと、胃に食物ではないにかが詰ったような気がする。

「バタないの」

「ありませんよ」

と、ようやくばあやはふりむいた。

「ご飯と味噌汁食べたらどうです？　好き嫌いはつかしするから、目玉だけ大きくて痩せっぽちなんですよ……」

またお説教かはじまった。わたしは舌をたしてみせ、肩にたれた髪をゆさゆさゆすぶりながら、台所をとびだした。

繁華街に近い煙草屋で、わたしはパットを一個買った。わたしは一番おいしくないパットで我慢しなければならぬ。お小遣いをいつ貰えるか当てはないのだから。わたしのスラックスのポケットで、十円硬貨が七枚歩きたびに音をたてる。わたしは、父のシャンプーから持ち出した百円札で煙草を買ったのだ。

街は賑やかであつた。高い百貨店の影の道路に、風船売りや花屋の車がたくさん並んでいた。原色の毒々しい造花、それから本物の百日草、矢車草、金仙花、紫苑、雛菊。菊が一番多い。紋付の羽織を着たお婆さんや、子供連れの中年の婦人、古ぼけた背広を着た老人が花をすこしずつ求めては、百貨店の前の停留所からバスに乗り込む。次々にくるバスの車体には行先が書いてあつた。……臨時、墓地行。

ようやくわたしは思いあつた。お彼岸なのだ。あたらしい言葉でいえば秋分の日というのだろ。わたしはまた思い出す。わたしが台所をとびだしたとき、コンロの上でことごと音をたてて、

白い湯気を吹いていたお鍋の中味はきつと小豆なのだろう、と。ばあやはオハギを作るだろう。彼女は決してお彼岸とか、お盆などを忘れないのである。バタを買うお金がなくても、小豆ならばあやや買うに違いない。そして彼女はあの黴臭くて陽の当らぬ奥座敷の途方もない大きな、ひかった金具のいっばいついた仏壇にオハギや果物をそなえ、ながいあいだ念仏をとなえる。そこには彼女が愛している、わたしの曾祖父、祖母、そして母の位牌がある。わたしの家で、仏たちに礼をつくすのは、四十年近くもわたしの家にいる他人のばあやだけである。

今日は死者たちのお祭らしい。しかしそうではなく、秋分の日、ただ秋という季節の祝いの日なのかもしれない。街は賑やかだし、綺麗な服を着た人々が、いっばい群れているのだから。

わたしはわたしと同じ年頃の娘たちの姿が眼についた。娘たちはワノピースや、秋向きの薄色のコートを着て、赤や緑や紺の靴をはき、ベレやボノネト型の帽子をかむっている。わたしのかむっている帽子は、紺色の登山帽だ。それにわたしは里のスラノクスに、大柄なチェノク模様のブラウスを着て、ズノクの靴をはいている。わたしのような格好の娘はいない。それにわたしは一人だ。わたしには連れがない。

しかしわたしは一人で歩いていることも、祝日の街に釣合わぬ少々おかしい服装をしていることも、べつにどうということもないのだ。わたしはかえってたのしい。わたしはのひやかに、自由に、ポケノトに片手を突っ込んで歩いているのだから。もっとも、わたしはたいいスラノクスにブーツかセーターだし、いいドレスなんて一着も持っていないのだ。

街に人が溢れていたが、風もなくおたやかな秋の日和である。わたしはすこし目を細めて真青にひかった空をみあげた。小さな黄色いゴム風船がひとつ、ゆらゆら空をただよっていた。街の賑わ

いのなかから、飛びたつていった風船だろうか。風船の周囲は街の賑わいから隔絶された、ひっそりと明るい空の光景を形づくっていた。風船はゆっくり、街の上を流れてゆくらしい。わたしは風船を眼で追いつづけ、危く誰かにぶつかりそうになった。

このとき、わたしの耳にどういうわけか、門を出るときにかんじた、あのたくさんの旗のひそかにはためく音が蘇^{よみがえ}ってきた。きっと風船のせいなのだろう。

しかし、わたしはひどくたのしくなってきた。本当に旗が鳴れはよいと考えて。それから空には風船があればよい。空の色と同じ色の数限りない青い風船が。そのときはむろん、街中の音は絶えなければいけない。

わたしは想像した。

街中の音は絶えている。でも商店の鐙^{ようど}戸は全部開き、店先には靴や毛糸やトラノク、果物、ドレス、家具、パンなどいつもよりずっと豊富に商品がならんでいる。明るい、透명한陽が街路にふりそそぎ、その街路には誰も通ってはいない。わたしだけをのぞいて。なぜなら、その日はわたしたけのお祭りだからだ。旗はわたしのためにだけ鳴り、風船はわたしのためにだけ空にあがるのだ。わたしは雲母^{うんも}を薄く引きのばしたような、ひかっただけの白い衣裳^{ようそう}をまとい、カトレアの花束のなかに顔をうずめて、ひっそりとほほえむ。その日わたしは木婚を受けるのだから。ダビデ王の、ソロモン王の、あるいはダリウス一世の木婚を。そしてわたしは愛するだろう。未来も過去も考えず。そのためにわたしの祝日がある。

わたしはまた誰かにぶつかりそうになった。しかし、わたしの眼からたくさんの青い風船が消えはしなかった。わたしは一人で笑いだした。

わたしが、伝説的な古代の王たちから求婚される筈はないが、そう考えることは楽しい。わたしはロマンティスト、夢を食べて生きている傾向が多分にある。しかしすくなくとも、現実にお見合いの申込みをうけたりするよりは、ソロモン王との結婚式を思いうかべるほうが、どれほどましだろう。わたしはお見合いの話しを受けたことがある。父がどこからか、わたしの夫にしてもよさそうな青年を探しだしてくれるのだ。たぶん父は、いろいろな知人に頼んでいるのかもしれない。父はわたしのことが、いくらか気がかりなのだ。わたしのわがままさと、わたしのからだのことが。

わたしのからだのこと……。そう、わたしの左手は普通の人のように自由にならない。このごろは軽い物を持ったり、物を押えたりすることはできるけれども、三年くらい前には棒のように硬直して動かなかったものだ。しかし今でも屈折することは難しいし、怖い。肘にあの烈しい痛みがもどってくるような気がするのだ。わたしの左腕の肘の状態は、関節強直というのだそうだ。関節結核に冒され、それをこじらせたのである。

わたしはよくおぼえている。肘が痛みだしたころのことを。あれは敗戦の年の翌々年。わたしは数え年で十五になったばかりだった。

まい日、わたしは女学校から帰ると、いろいろな家事をしなければならなかった。お掃除、洗濯、薪割、おうどんを打ったり、朝食用のパン種の用意をしなければならなかったのだ。わたしのほかに、誰もそんなことをする家族がいなかったからである。信彦は小学生であつたし、父は家のことなんか、みむきもしないたちであるし、そしてばあやといえは胃瘻に苦しんでいたのだ。平生ばあやはとても丈夫で、風邪などもひいたことがなく、わたしたち姉弟が病気にでもなれば、にやに

や笑ってばかりしていたものである。きつとばあやの胃袋は、食事の量が少なく、しかも不味いの
に挑戦でもするように、毎日トウモロコシの粉をこねたお団子を無闇にほしがったのかもしれない。
わたしはお掃除や食事の仕度をするのは、さしてつらいとも思わなかった。ただいやだったのは
水汲である。運悪く、ばあやが寝込むと同時に、わたしの家の水道管が凍って壊れてしまった。わ
たしは何度も市の水道課に、修繕に来てくれるように電話をかけた。しかし、いつも電話の相手は、
資材がないとか、人手不足だとかいって、ひどく突堅な返答をするだけだった。敗戦のあとには
水道くらい壊れるのも当然だ、とでも言いたげな口振りであった。

学校から帰ると、わたしはまず大きなバケツを二つぶらさげ、五丁も先きの漁師町にある共用栓
まで水汲みに出掛けた。普段話し合ったこともない近所の家で、水を貰うのはいやだったからであ
る。もし季節が夏であつたら、わたしは遠い森のなかの泉に壺を抱えて水汲みに行く、童話のなか
の女の子のような気持になれたのかもしれない。しかし、あれは冬だったのだ。雪が降らなければ、
きつい冷たい西風が吹きまくり、雪も風もない日は、髪の毛まで凍ってしまいそうな寒さがつづく
真冬だったのだ。

そのうえ共用栓に行っても、すぐ水を汲めるわけではなかったのである。あちこちの共用栓が、
凍つたり、こわれたりして、わたしが行く時分には、何十人も人が、バケツや桶を抱えて、蛇の
ようにうねうねと長く並んでいるのだ。たいていは漁師町のおかみさんや、子供たちであつた。彼
等はおそろしくむつりした顔をしていて、ときどき先に汲もうとして押しのけ合つたり、自分の
ほうが先に来たとか、後だとか言って怒鳴り合いをしていた。わたしは自分の汲む番が来るまで、
手袋の上から息を吐きかけたり、足を踏み鳴したりしながら、ひどく温和しく待つていた。わたし

は戦争に負けた悲しさ、あるいはわびしさというものを、齒をカチカチ震わせながら十五のわたしが感じたこともよく覚えてゐる。

わたしの左の肘が痛みだしたのは、いつごろからであらう。ばあやが胃瘻癰をおこすそのよほどまえから、病菌は関節にしのび寄っていたのかもしれない。最初、わたしの肘は重いバケツをさげで、家にたどりつくときとずきずき疼いた。熱感のない、不快な重い痛みであった。やがてそれはおうどんをこねるときも、弟やわたしの下着を洗うときも学校にいるときも疼くようになり、夜、痛みのために眠れぬようにさえた。わたしは一人で肘にエキホスを貼り誰にもそのことを言わなかった。みたところ、すこし腫れているように思われる程度で、わたしの痛みは、口で説明しても誰にも知って貰えそうになかったからである。それに病気のばあやに言うのは、なんだかいやだったし、父とは父娘らしい会話を交したこともなかったのだから。わたしは毎日、水汲みや、その他の家事をつづけた。わたしの心のなかには、わたしがどこまでこの痛みに耐えることができるか、ためしてみようというような気持もあったようである。

しかし、ある日わたしはどうとう教室で失神してしまった。そのとき、わたしは体のなかの力が、全部尽きてしまったのかもしれない。わたしは激痛と、不眠のために貧血を起してしまったのだ。

わたしは先生やクラスメートに抱えられて、衛生室のベッドに運ばれてから、わたしが貧血を起したことに気づいた。しかしわたしは、わたしの倒れた場所が、わたしの家でなく、学校であったことにむしろほっとした。わたしの家族よりもクラスメートや先生に苦痛を訴えるほうが、まだしもましのよう思ったのだ。

わたしの級の担任であった若い音楽教師の市橋先生が、知らせを聞いて衛生室に飛び込んできた。

そのころ、わたしは誰よりも市橋先生が好きだったので、彼の姿をみると急に悲しさがあふれた。わたしは彼に、肘が痛いことを訴えた。わたしの声はひどく低くて、老婆のようにかすれていた。養護教官であつた中年婦人の花岡先生が、わたしの左腕をベッドの中から引張りだそうとした。わたしは痛さのために短かく叫んだ。

そのときすでに、わたしの関節は屈折できなくなっていたのである。

「関節炎じゃないの？」と花岡先生は、眉をひそめて周囲の人たちに囁いた。市橋先生が、わたしを家まで送りとどけようと、言いだした。わたしはでも先生に、家へは帰らずに真直ぐ病院へ行きます、と言つたのだ。わたしは家へ帰っても、痛みがどうにもならぬことを知っていたし、わたしがいままで一人で我慢してきたのだから、一人で医者に行つて処置せねばならないような気もしたのである。

しかしわたしは市橋先生に負われて病院に行った。ベッドから降りたとたん、わたしはまたよろめいてしまったのだ。わたしはとても、病院までは歩いて行けそうもなかったのである。それに、戦争が終つて二年にもならぬそのころ市内には營業用の車なんか、ひどく少なかったのだ。

粉雪が、ひどく静かに降つていた午後であつた。わたしは生徒玄関まで級友に抱えられてゆき、そこから市橋先生に背負われた。

「先生、軽いでしょ。怜ちゃんのウエスト級で一番細いんだから……」
と十人ばかり送りに来ていた級友の一人が言つた。

先生は「よいしょ」と、掛声をかけてわたしを背負い、「こら、教室に戻れ。何の時間なのだ？」とすこし笑いながら、級友たちを叱つた。しかしクラスメートはわたしたちが校門を出るまで玄

関に立っていた。

「せんせーい、恰ちゃんを直してあげてね」

校門を出るとき、澄みとおった友だちの声がきこえた。わたしは振り返らなかった。振り返る元氣もなかったのだが、ひどく悲しくて、振りむいたりしたら声をあげて泣きだしそうな気がしたのである。

市橋先生は、ときどきわたしを雪の上に降した。

「重いんだね、案外」と、彼は肩で喘ぎながら、いくぶんおどけたように言った。きっと彼は、わたしを背負って街を歩くのが、照臭かったのだろうし、わたしを力づけようとしたのかもしれない。

わたしが連れて行かれたのは、高台にある総合病院であった。戦災をいくらか受けたので、その病院の古い二階建の建物は、床がきしみ、板壁がほうぼう破れて、おそろしく寒かった。寒さは診療室のなかにまで忍び込んでいた。わたしを診たのは、背の高いドイツ人のような顔をした外科主任であった。外診とレントゲン透視の結果、医者わたしにの病名をひどく事務的に市橋先生に告げた。

「なんだって今まで放っておいたんです？」

先生に答えられる筈がない。先生は、すこし咎めるようにわたしをみつめ、そして悲しそうな顔になった。医者は、わたしと先生を見較べて、わたしの腕を切断しなくてもすむかどうかは受合えない、と今度はひどく鄭重に言った。

わたしは腕をもがなくてもよかった。関節強直にはなったが、その日にすぐ切開手術をうけて、

どうやら外見上の不具にならずにすんだのである。しかしわたしは何度も手術をうけ直さねばならなかったし、一年近くもその病院に入院し、学校は退学してしまった。あの日、校門を出るとき、泣きたしそうになったのは、それがわたしにとって、Auld Lang Syne を歌うべき日であったからだろう。

本当にわたしは、あの七年前の、粉雪の降っていた日のことをはっきり覚えていて。病室が決まるまで市橋先生と二人で布団のない鉄製のベッドに腰かけていた、窓硝子の破れた、殺風景な小屋のこと。硝子の破れから吹き込んでいた、さらさらした固そうな雪の粒のこと。

市橋先生は、わたしの家に電話をかけたあと、父が来るまで、ずっとわたしに付き添っていたのである。先生は、わたしの肩を抱いていた。彼は、病院に着くまで、おどけたりしていたのに、わたしが重症であることを知ったとたんに、すっかり落着きをなくしたようであった。

「兵藤君、兵藤君……」と、彼は絶えずわたしの名を呼んだ。それ以外の言葉を忘れてしまったように。彼は、わたしの右側に坐っていたから、肩を抱いていた掌をすべらせて、わたしの悪いほうの左腕をときどき撫でた。

「君のこの手、なくなるのか」

と、彼はいくぶん声を震わせて言った。わたしのほうが、まだ落着いていた。きっと人間は、それが絶対に脱けたされない、自分自身の痛みである場合は、案外落着けるものかもしれない。

「君はピアノが巧かったのに」

先生は、勝手にひとりで喋り、わたしの髪を撫でた。

「秋の音楽会のね、木枯しのエチュードはよかった」